

「大自然の師」

植物は天自然の力に支配を受け、生成化育の力によって神の御意思のままに成長し、五情を持っていないから、ひたすら神の御慈愛のもとに成長している。五情のないのは神の恩愛によるものであって、火事があっても自ら移動する自由を持たない木のために、熱いという苦しみの感じを與えない、切られても痛いという苦痛は與えられていない。

そこで植物に対する人間の介錯が必要となって来るわけであって、木は人の介錯を加えられるとよく繁茂する。その代償というか感謝というか、植物はすべて人のために活躍してくれるのである。例えば菜種は実を稔らせ、油を取らせて人のために公益を與える。木は徳を持っており、宇宙の神の御意思そのままの活動をするから人に至福を與える。材木がなければ、家は出来ず、また燃料に事欠くではないか。人は植物に感謝し、植物の繁栄に力を致すことが、萬物の靈長としての天賦の情愛・使命である。

木も実に神秘なる働きがあり、風を呼び起して風と共に生活する。人は木の涼風によって蘇生の思いをしているのではないか。木は切って用いられて後は火と化し、土と化し、再び木を育てる働きをなしている。木の意思は自然のままである。自然の世界で成長している。人間もこの木の姿を観てこれを鏡となし、大自然に従う日常生活をいとなむことが自然の師を得たことになる。木を王としているゆえんであって、植物の中心として、木を対象として極徳を得る道とするがよい。然しながら木の相を観て判断し、その精神を裁いてはならない。木は春夏秋冬の四季ごとに色に示し、形によって知らしているからである。

植物に感謝のない人は宇宙の神の御意思に逆らっているということになるのである。